

「ひきこもりを巡るまなざし」 命を守るために、かかわる私たちの姿勢はどうあるべきなのか？

3月1日(日)、SHIP!主催で開催された故・芹沢俊介氏の『引きこもりという情熱』復刊記念トークイベント「ひきこもり(押し付け)支援、お断り。」ジュンク堂書店(池袋本店)、発行所くるんばの協力のもと、会場には80名超が集った。

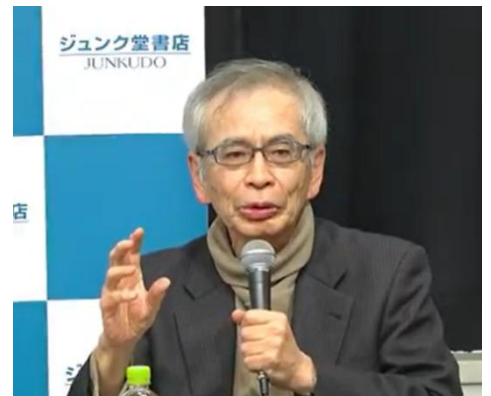
2000年初頭、ひきこもりバッシング、無理にでも引き出そうとする嵐のなかで、ひきこもっている本人たちの側に立ち、徹底し命を守るための著書として出版されたのが『引きこもりという情熱』(2002)だ。24年ぶりの復刊を記念した本トークイベントを通じて、支援をめぐる「昔」と「今」をたどり、社会から「ひきこもり」に対して向けられてきたまなざし、命を守るために必要なかわりとは何かを考えたい。(SHIP!第4号に関連記事掲載)(アーカイブ動画配信あり)

自分の身を守るためにひきこもらざるをえない人たちに 「押し付け」はどういう意味を持つのか？

故・芹沢氏と共に、子どもの命を守るために論陣を張ってきた、児童精神科医の高岡健さん。芹沢さんは、引き出し支援、暴力的支援ビジネスが横行していた24年前から、「引きこもりは、自分の身を守るためにひきこもりを選択せざるを得ない人たちが多様な層で見られる」「“する”ではなく“いる”に価値がある」、つまり「存在論的ひきこもり」の大切さを訴えてきた。

「ひきこもりには意義がある。十分にひきこもることができれば、自分と対話して、満足する方向に進もうとする。選択肢が複数あるから成り立つ。そこから自分の人生観、価値観に合ったものを選び取っていく。選択肢がひとつとする大人や社会の価値観を押し付ければ、ひきこもりが悪化するか、押しつけられた人生を歩むことになり、根本的な解決にならない」(高岡氏)

昭和の時代、新自由主義の到来とともに、個人の自助努力が優先され、「頑張った人が報われる」「うまくいかないのは個人の努力が足りないからだ」という自己責任論が叫ばれるようになった。その後、ひきこもりや家庭内暴力を抱える家族に対し、「強制的に連れ出してスパルタ教育を行えば治る」という看板を掲げ、高額な費用を取る支援業者が、メディアに頻繁に登場し、2006年にはアイメンタルスクール寮生死亡事件(愛知県)等の悲劇を生んだ。



「何を言っても信じてもらえない」 引き出し症候群とその周辺にある考え方は、本人に 選択肢を与えないということ

長年、引き出し屋を取材してきたジャーナリスト池上正樹からは、今年2月、KHJ 全国ひきこもり家族会連合会の「暴力的支援対策プロジェクト」相談窓口にあった50代女性のSOSの声を紹介(24時間監視の部屋。月額30万の施設料)。家族からは「また施設に連れて行く」と言われている事例だ。「長年、家族と闘ってきて疲れた。あと3年休ませてほしい」という声があった。また、40代

でひきこもっていた「きょうだい」が、父親の死後、自治体職員がやってきて、3日間かけて説得ののち救護施設に連れていかれた。施設料は月72万円、厳しい外出制限で監視状態に置かれた。当事者らは、施設スタッフに、再三「ここから出たい」と訴えたものの、施設側は聞き入れず、KHJ 家族会に SOS の電話があったのだ。池上さんは弁護士と一緒に、ふたりを救出し、今は安心できる環境とサポートを受け、新たな日常生活を営み始めたところだ。生前、父親も相談を繰り返したものの疲弊していた状況が続くばかりだったという。結果、家族や本人のサポートは行政主導で行われ、居住・移転の自由が侵害された。「引き出すことは巧妙化して続いている。決して昔の話ではない」(池上) ※事例は SHIP ニュース 8 号でも掲載。

両事例からわかるのは、「(本人たちは)働いていないとか、ひきこもっているだけで、(家族にも支援者にも)自分の話を信じてもらえなかったといことだ。選択肢が1つしか提示されず、それだけがすべての“解決策”であるかのように説得されている」。

ひきこもりバッシングを通じて見えてくる「昭和的価値観」。特に高度経済成長期の競争を生き抜いてきた親世代には「頑張った人が報われる」、子世代は「努力が足りない」という叱咤激励が当たり前に行われた。本人の声を抑圧した結果、「押し付け」と「説得」且つ、「選択肢のない」支援の歴史を生んだとも言える。それらの時代の延長線上に、現在の支援不信(他者不信)が生まれ、8050 問題を招く一因にもなっていることは想像に難くない。

ゼロハック思考に陥りやすい私たちの「まなざし」。選択肢はひとつか？

小学校2年生から不登校、ひきこもり状態で家族以外とはほとんど話さずに10代を過ごした喜久井さん。

「学校に行くかいけないか、外に出るか出ないか、働くか働けないか」そういう追い詰められ方によって、生き方の選択肢、グラデーションがどんどん失われていったと語る。「もしそこに『ひきこもっていてもいいんだ』という声があったならば、生き方の多様性を考える余地は確保されるものの、『なんで働けないんだ、その原因は何か』そういうまなざしを向けられたとたん、ゼロかハックかの見え方が極まり、世界がすべて崩壊してしまうような、そういう厳しさを感じてしまう」と訴えた。



支援恐怖症の背景にあるもの「支援とは社会そのものであった」

“ひきこもり支援”は“脱ひきこもりを図る人”に対する支援のみか？

「社会そのものが恐ろしいと感じている時期に、支援は社会そのものだった」と喜久井さんは述べる。世の中の「当たり前」への拒否感があるなかで、「あなたはこうした方がいいですよ、助けますよ」という言葉が、社会そのものからの「圧力」のように感じられたと語る。「どのようにあるか、ではなく、どのようにするか。原因と結果ばかりが求められるのがすなわち社会であり支援だった。選択肢のない問い詰めは、『生きるか死ぬか』になる」(喜久井さん)

子どもの命は、今でもないがしろにされていないか

「学校に行けなければ、命を絶つしかない」はおかしい

教育や支援は、本来、人を生かすためのもの

いざとなったら本人の命を守るために闘うのが家族、支援者の役割

喜久井さんは、「今でも子どもの命を守ることがないがしろにされている実態」を訴える。小中学生の自殺は、夏休み終わりやゴールデンウィーク明けに増える。学校に行きたくない子どもが長い休みを経て今日からまた

学校に行かなければならない。でも自分は学校に行くことはできない。だったら命を絶つしかない実態だ。

子どもの自殺が当たり前のように報道されているが、「それってやっぱりおかしいということを感じていたい」と喜久井さんは訴える。「命をどう守るのか。教育や支援は、本来人を助けるためのものにあるはずなのだが、そうならない。それがたとえ 100 万人に 1 人だとしても、命を絶つのはおかしいんだと。支援によって命が絶たれるのはおかしいんだということを感じていたい」(喜久井さん)



フリースクールで講義を行う芹沢俊介氏(提供:芹澤真幸氏)

「親世代が混乱し、若者世代が危険視されていた中で、芹沢氏は徹底して子どもの側に立ち、新たな時代の家族像を示した」(写真:故・芹沢俊介氏)
(SHIP!第4号より 執筆:喜久井伸哉)

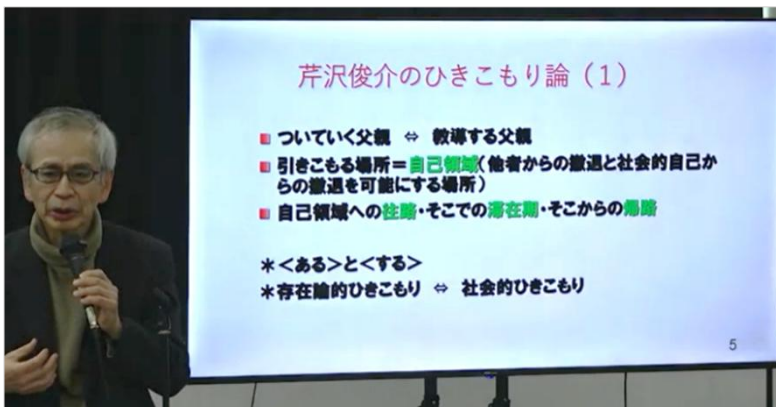
故・芹沢氏の本の中に「家族とは命の受け止め手なのだ」という言葉がある。不登校やひきこもりを「病気」とする時代もあった。しかし、自分の身を守るために学校から社会から、ひきこもらざるをえないという理解と背景には、必ずそこに本人たちを追い詰めた何かがある。その背景を見ずして、否定的な認識とともに、病的な状態であるから治療せよとするのは「本末転倒である」。家族や支援者がすべきは、「本人の命を追い詰める不当な圧力と闘うのが役割」だと高岡氏は強調する。

本人に「ついていく」(母親、父親、支援者)という姿勢を芹沢氏は伝えているが、ときに本人の命を全力で守るのが家族であり支援者である。(本人の意向を無視して)働かせる支援(働け、怠けるなといった強迫的観点からのかわり)、選択肢のない社会参加を前提とした支援から、命を守り不当な圧力と闘ってくれるのも支援の役割である。そのためにも「人権意識のある相談員や、(似たような経験をしている)ピアサポーターが必要」、

「本人が十分にひきこもり続けることを応援する」、「本人がひきこもるプ

ロセスを邪魔しない」ことがなぜ重要なのかを認識することができる。ひきこもり状態は、本人を世間や社会から自縄自縛するものでもある。その生きづらさと向き合っていく時間や過程をどうとらえるか。ひきこもりを認められなくても、あなたの存在を認め得る人がひとりでもいることがどれほど大切か。芹沢さんのひきこもり論に「善意の道は地獄へ通ずる」という言葉がある。かかわる私たちが、この自覚とともに、自分を戒める目を伝えてくれる。私たちは、ひきこもりを巡る歴史から学ぶことができる。そして、「命を守る」ための支援のあり方を、これからも考え続けていく必要がある。(コーディネーター SHIP! 発行人 上田理香)

<故・芹沢俊介氏の『引きこもるという情熱』 キーワードから考える >



●存在論的ひきこもりには、社会からひきこもるだけではなく、自己からの撤退がある。(自己領域での格闘)

●ひきこもりのプロセス「往路」「滞在期」「帰路」とは？

●自分自身のあり方を構築し直す「滞在期」を邪魔されず、十全に歩みきることがなぜ必要か？

●その子ども(本人)に、ついていく母親、その母親についていく父親 本人についていく支援者への転換とは？



著書『引きこもるという情熱』付録「引きこもりの家族学」高岡氏の講演より(写真上) ぜひ学びと実践の一助として著書をご一読ください(Amazon で購入可)



●3月22日～アーカイブ配信スタート●

(高岡健・池上正樹の講演資料、内田良子、長谷川俊雄メッセージ)

<https://shiphiki.jp/2026/01/29/5306/>



(こちらのニュース配信をご覧になった方には、
配信申込を引き続き受け付けています。SHIP 公式サイトまたは右記 QR コードより受付可)

15年ぶりに厚労省が、ひきこもりの支援指針を策定した「ひきこもり支援ハンドブック」講座。SHIP!では第1回から第10回まで、のべ653名のみなさんにご視聴いただきました。当事者講師、講師が信頼を寄せる支援者、有識者、かかわる対話パートナーの皆さんと学びを深めることができたことに心より感謝申し上げます。

一般社団法人SHIPひきこもりと共生社会を考えるネットワーク主催
「SHIP! SPACE」講座
当事者・家族と、ともに考える、学び合う、対話する、実践する 一步を応援

ひきこもり支援ハンドブック
寄り添うための羅針盤

支援ハンドブックの事例などを当事者視点から読み解き、本人の体験とともに、対話を通して考える実践講座 全10回シリーズ

対話のなかで見えた人生観、世界観、支援観には共通するキーワードも多くありました。苦しみの中で、それでも生き続けようとする道を照らしたものは、「本人自らの中から湧き出でる、意欲・関心」であり、外部からの強制や支配、否定に基づくものではなかったということです。支援は必要です。そこにある侵襲性を自覚しつつ、必要としている人が、必要としているタイミングで、必要な情報や、人、場所につながり、また、その後の関係をどのように構築していけばいいか、本講座の受講者アンケートからも多くのお声をいただきました。

「お話を聴いて、何を希望されているか、全部は叶えられないとしても、ひきこもりの方に限らず相談やお話くださった方に、どうしたらいいか一緒に考えることかなのかなと思いました」（受講者アンケートより）

<当事者視点からの考察>


全講座に通じる考察を、第10回当事者講師の喜久井伸哉さんのエッセイから一部引用抜粋お届けします。（ZERO HORA 4号 厚生労働省の『ひきこもり支援ハンドブック』（2025年）に見るこれからの「ひきこもり」論より）

発行所 くるんば

ZERO HORA
ゼロオーラ

特集1 時間は存在しない
長谷川俊・山崎 義典氏 / 二宮 啓輔氏 / 高田 隆夫氏 / 小野 龍也氏 / 野村 幸生氏

特集2 オールドメディア



2025
Vol.4

最新号4号にて喜久井伸哉氏のエッセイ収録
◆厚生労働省の『ひきこもり支援ハンドブック』に見るこれからの「ひきこもり」論

・これまでの現場では、「外に出ること」「就労すること」を重視した支援がおこなわれてきた。しかしそればかりでは、当事者の尊厳を傷つけかねない。ハンドブックは、学校や会社に適応さえすればよいという考え方を止め、当事者の「自尊感情の回復」を忘れてはならない、と説いている。

・たとえ無理をして就労したところで、精神的に不安定なままでは、ふたたび深い傷を負い、社会的なつながりから断絶しかねない。

・ハンドブックは就労支援を否定しているわけではない。選択肢の一つとして、従来に比べて重要性を大きく後退させているに過ぎない。しかし、「引き出し屋」にあたる事業者や、就労支援を優先させてきた団体は、ハンドブックを強く批判している。

・これは全体に言えることだが、ハンドブックは、支援におけるアクセルよりも、ブレーキの役割があるように思う。（中略）支援者がハンドブックを読んでも、具体的にどうすればいいかわからない、といったことはあるだろう。しかし、強制的なアプローチや、本人が望まないアウトリーチ（自宅への訪問支援）など、してはならないことはわかる。マニュアル的な「正解」がない状態で、方法を模索しつづけることが「支援」の一端だ、ということは「わかる」のではないか。

・関係者の一人は、支援者や親を「他律」と捉えることで、「自律」がわかりやすくなるのではないかと述べていた。（中略）
当人が自身によって考え、自ら選んだ「自律」的な価値観が「ゴール」になるのではないかと、ということだ。（中略）それはその人なりの世の中の出方であって、学校通学者と比べて、うしろめたかったり、劣っていたりするものではない。大多数が属するふつうの「世の中」とは異なっていると看做しても、「私は私」と思える「自分軸」のある生き方に、「自律」が表れてくるのではないか。

・ハンドブックに関するシンポジウムの壇上で、検討委員長の長谷川俊雄氏に、印象的な発言があった。「支援者は、これまで途方にくれてはならなかったのです」。しかし、「支援の途方もなさを、ようやく表にできる時代がきた」。

・支援者が、社会的な「正解」を当事者に押し付けるのではない。自身の迷いを表明しながら、当事者・関係者と歩んでいく「支援」のあり方が志向されている。これは現代のケアのあり方において、必要な視点であると思う。ハンドブックを起点として、「どんどん意見を上書き保存していきたい」とも述べている。支援者はどうあるべきかを明記した「完成品」ではなく、さまざまな声を受けながら、可変的に流動していく前提で作られている、行政が策定した冊子としては、たしかに先進的な要素を含んでいるのだろう。

SHIP! ハンドブック講座全 10 回 好評につきアーカイブ配信を随時受付中!

<お問い合わせ> 一般社団法人 SHIP ひきこもりと共生社会を考えるネットワークまで

<https://shiphiki.jp/> shiphiki@gmail.com

ひきこもり・生きづらさ 社会課題を考える



季刊「SHIP!」第 5 号 春号 鋭意制作中!

特集「ひきこもりと働く」(116 ページ)4 月 30 日発売!

ひきこもり者が「働く」こと「生きる」ことについて、当事者や家族、支援者、有識者の声から考える特集です。

<SHIP! 第 5 号 ラインナップ(タイトルは変更になる場合があります)>

●「自律」の先にある「働く」とは? —— 社会福祉士・長谷川俊雄さんインタビュー

●一人ひとりに合った働きやすい場と体験と〜「東久留米モデル」で地域のネットワークを構築し、超短時間雇用を実現〜

●感謝が生まれる職場の先に見える希望の街づくり 「超短時間雇用モデル」を提唱する

東京大学先端科学研究センター教授・近藤武夫さんインタビュー

●人との出会いによって、踏み出せた一歩 しろひげファミリー 江戸川区みんなの就労センター

●働くことに悩んできたひきこもり経験者たちが、働くことについて語る座談会

〜働きたいか、働いていた時にどんな思いを感じたのか、働くことの意味とはなんなのか〜

●【高知県四万十市】 解体会社が当事者と始めた“車福連携”の可能性

「つくるのは苦手だけど、壊していくのは単純に楽しい」

●「生成AI」を学んで在宅ワーク メタバースを使った札幌市のショートタイム体験会に参加してみた

●稼働だけが働くことではない。生きていく術はいくらでもある! NPO 法人「仕事工房ポポロ」代表 中川健史さん

●<マイボイス・ユアボイス>「焦るな、そのままがいいよ!」〜ひきこもりと就労を行き来した私〜

●<マイボイス・ユアボイス> 人生はチャレンジだ ~諦めなかった先で見つけた居場所~

●<マイボイス・ユアボイス>「死ななくて本当によかった」 重度のひきこもりから、世界とつながる日常へ

●【連載第2回 西鉄バスジャック事件から 25 年】 我が子のことが見えていますか〜事件から考える親子のかたち〜

●知られざる「ひきこもり」の歴史 いつから「こもり」ことが問題になったのか? 喜久井伸哉

●【新連載】ファイナンシャルプランナー畠中雅子さんに聞く

ひきこもり状態の子どもを抱える「サバイバルプラン」のすすめ

●「家族会」ってどんなところ? <KHJ福井いっぽの会> 人生を共に歩んでいく存在として

●制度の狭間—8050・兄弟姉妹の立場から「家族を見捨てるわけにはいかない」 きょうだいに強いられる経済的負担

●【連載】「精神科医がこころの病気を解説する Ch」益田裕介氏に聞く

第 1 回「ひきこもりからの回復のために、家族ができることとは」

●SHIP×ART ●SHIP×PHOTO ●SHIP 文学

季刊「SHIP！」2026年度・定期購読(新規・更新)について

日頃より、季刊「SHIP!」のご購読及び、活動へのご関心をお寄せくださり誠にありがとうございます。
本誌は全国書店販売に合わせ、より充実した内容をお届けするため、第3号よりページ数を拡大し、
定価を1,100円(税込)へと改定いたしました。次年度更新となる2026年度分より、下記の通り購読料を
改定させていただき運びとなりました。次年度も皆様と共に、少しでも生きやすい社会を考えるための充実した特集を
予定しております。何卒ご理解をいただき、引き続き変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

- 第5号(春号):ひきこもりと働く(2026年4月30日発行予定)
- 第6号(夏号):ひきこもりが住みやすい街 暮らしと住まい(2026年7月30日発行予定)
- 第7号(秋号):ひきこもりと地域と8050問題(2026年11月30日発行予定)
- 第8号(冬号):安心できる居場所とは(2027年1月30日発行予定)

- 定期購読料(2026年度更新分より) **6,000円(年間4冊・送料込)** **会員の方には講座割引等の特典があります**
- ネットワーク会員(個人)12000円(法人)22000円(年間8冊・各号2冊ずつ 送料込み)

●【継続更新】お手続き方法

次年度も継続購読いただける場合は、**新たなお申し込み手続きは不要です**。下記のいずれかの口座へ、購読料(購読会費またはネットワーク会費)のお振込みをお願いいたします。お振込みの確認をもって更新完了とさせていただきます。

【PayPay 銀行】

支店 005 ビジネス営業部 普通口座 8726238
シャ)シップヒキコモリトキョウセイシャカイワカンガエルネットワーク

【ゆうちょ銀行(新設)】 記号:11390 番号:12089171

名義:一般社団法人SHIPひきこもりと共生社会を考えるネットワーク

他行からのお振込み: 店名:一三八(イチサンハチ) 店番:138 / 普通預金:1208917

- 【購読停止の場合】 ご入金がない場合は、自動更新はされませんのでご安心ください。
- 【新規の定期購読申込みの場合】 こちらよりお申込のうえ、お振込みをお願い申し上げます。

<ご購入フォーム> <https://x.gd/HQYGg>

定期購読サービス SHIP! 定期購読料 ¥6,000

- ✓ 買い忘れの心配なし!
- ✓ 確実にお手元へお届け!

SHIP!定期購読会員の方には、SHIP購読者限定の講座、交流会参加、割引、アーカイブ動画の視聴などの**特典**があります。

第5号(春号) ひきこもりと働く (2026年4月30日発行予定)	第6号(夏号) ひきこもりが住みやすい街 暮らしと住まい (2026年7月30日発行予定)	第7号(秋号) ひきこもりと地域と 8050問題 (2026年11月30日発行予定)	第8号(冬号) 安心できる居場所とは (2027年1月30日発行予定)
---	--	---	---

定期購読 デジタル版読み放題

定期購読の特典

デジタル版の定期購読なら **最大 20%OFF** 875円/冊

バックナンバーが **読み放題** お申込みはこちら

【SHIP! デジタル版】の購読が可能になりました!

富士山マガジンのプラットフォーム(下図)にログインして、いつでもパソコン、スマホ、タブレットから閲覧可能です。

富士山マガジンからのお申込詳細はこちらから
<https://www.fujisan.co.jp/product/1281706950/>
お問い合わせは「富士山マガジンサービス」まで

サイトトップ

マイライブラリ

- 購入済み
- お気に入り
- ゴミ箱
- タグ読み
- 毎日更新中! おすすめ雑誌
- 本日発売! 最新号試し読み

検索

ログアウト

プライバシーポリシー

特定商取引法に基づく表示

利用規約



ひきこもり・生きづらさ・社会課題を考え、発信する ライター・編集実践講座

現場を知るベテラン講師たちとワークや質疑応答を交えながら、当事者目線を大事に洞察力、観察力、考察力を身につけ、社会を見つめる視点を学び、発信力を習得します。

第10回

ひきこもり、生きづらさ、私たちの社会課題 見えなかったものに光を当て、当事者発信のあり方を学ぶ

ライター講座は、いよいよ最終回(ハイブリッド)
私たちが感じている様々な社会課題について
いち当事者として発信し、一緒に対話を行います

3月26日(木) 18:00～20:30

発信が自分たちの 社会を変えていく

講師

いけがみまさき
池上 正樹



「SHIP!」共同代表、ジャーナリスト。約30年ひきこもり関係取材し数千人の当事者たちと関わる。NHKドラマ監修のほか、メディア出演・著書・講演会出演多数。

うえだりか
上田 理香



「SHIP!」共同代表、コーディネーター。家族会立ち上げ、ピアサポーター研修、対話交流会事業を10年以上実施してきた。相談事業・講演会出演多数。

◆本講座のねらい◆

「見えなかったものに光を当てる」SHIP!は、社会への違和感、「なぜ?」の問いを大切にしながら自分にしか語れない経験、痛み、心の揺らぎ、主体的な思いを大切にしている。当事者、経験者の視点には、私たちが生きやすい社会、学校、職場、家族関係のヒントが必ずある。ライター講座最終回では、SHIP!編集部を立ち上げた発行人の池上正樹と上田理香とともに、当事者発信のあり方について、受講生の皆さまとSHIP!発行人や編集部員と一緒に対話しながら考える時間を作る。SHIP!の編集は、生きづらさを抱えながら、支え合い、学び合い、助け合いのなかで進んでいく。だから対話を大事にする。表現、発信の場づくりに関心のある皆さま、ぜひ参加してみませんか?

【会場変更のお知らせ】

当日のリアル受講者の会場は、渋谷インクルーシブシティセンター<アイリス>に変更となりました。

〒150-0031 渋谷区桜丘町 23-21

渋谷区文化総合センター大和田 8階

受講費

一般	1回 4,000円(税込)
ひきこもり・生きづらさ 当事者・経験者・会員	1回 2,000円(税込)

受講には「SHIP!」購読または会員登録が必要です。

お申込、詳細はコチラ→



KHJ ジャーナル「たびだち」バックナンバー取扱中(「SHIP!」の前身となった情報誌です)。当事者・家族会主体の初の情報誌「たびだち」の発刊に至る経緯、当事者主体の編集体制作りについても話題提供したいと思います。

<https://www.khj-h.com/papers/our-newspaper/>

KHJジャーナル

たびだち

— バックナンバーのご案内 —

